『余白の人生』の生き様を考える
…高齢者たちの地域づくりへの道…

長野県飯田市　ひさかた風土舎　主宰　長谷部　三弘

生き様の選択肢…あなたはどれを選択しますか…

人生加齢に従い、衰える体力、失われる気力、乏しくなる財力は誰でもが通過する道である。

また、人それぞれに生き方がある。世の中の流れに身を任せるか、不平不満はあっても我慢するか、いつも不平や不満を並べて暮らすか、何事にも積極的にトライするか、タイプはさまざまだ。

さらに、暮らし方のタイプはいくつもある。生涯現役で頑張るか、サンデー毎日と考えるか、楽隠居を決め込み気楽に暮らすか、晴耕雨読の日々もある。小生はもっぱら〝晴耕雨寝〟の生き方である。

あなたなら、どれを選択しますか？

鎮守の杜構想…十三の郷づくり…

余白の時間を大切に…高齢者の課題…

60歳で定年退職、平均寿命で80歳、余白は7300日だ。もう小生も余白を食べてしまった。あっという間だった。

江戸時代の儒学者「貝原益軒」は〝老後は、若き日より月日の早き事、十倍なれば一日を十日とし、十日を百日とし、一月を一年とし、一日を空しく過ごすは惜しむべし、老後の一日、千金に当たるべし〟と、説いた。

下水道汚水処理施設『みずはの苑』

若いときは金がない、働き盛りは時間がない。今、リタイアして自分のために使える「自由な時間と、自由に使える小金」がある。

この時間とお金をどのように活かすか、高齢者ライフワークにとって生き様を選択する課題である。

地域活動に高齢者をかり立てるもの

「年金＋アルファー＝ゆとり・潤い」の暮らしの方程式は出来ていますか、ここでいう＋アルファーとは、金銭のことばかりではない、現役時代の経験と人脈を活かす活動のことや、田畑を耕すことであったり、健康で活動することをいうのである、＝のゆとり・潤いは、暮らし方の充実した日々から生まれるものだと思う。

街とむらの交流 野菜の産直

今までの経験を世のため、人のために役立てたい、自分の住む地域を良くしたい、という願望がエネルギーになって、地域活動が高まり、高齢者たちを活動にかり立てるのだと思う。

旅行に行った観光地でも、集会の参加者も高齢者で溢れている。高齢者が元気である証左だ。

少子・高齢化と過疎で「地域に若者が少ないから活性化しない」とよくいう。高齢化で福祉に、医療にお金がかかる。それは当然だ。自助共助公助の福祉を推進しなければという。

〝自助〟とは、われわれ高齢者自身のことだ、共助・公助だけに期待している訳ではない。各地の高齢者たちは、健康教室に参加したり、実践塾で学んだり、実践グループを立ち上げたり、高齢者たちは、各地で自主的な地域活動を行い、地域に貢献している。

また、青年団、婦人会の地域組織が崩壊する中で、高齢者組織は今なお健在である、この地域組織こそ地域づくりの根幹であり、財産でもある。この組織の維持発展には、キーワードが必要だ。

ひさかたワインの試飲会

地域づくりのキーワード…住民自治の発展…

組織集団を維持発展させていくために、いくつかのキーワードがある。①地域を〝興す〟よろこびがある。興すとは、地域の中の停滞しているものに、他から刺激を与えて、生き生きさせることである。つまり、その地域の課題を探すことである。②地域に拓く〝ゆかしさ〟がある。ゆかしさとは、こころを惹かれることで、住民が見たがる、聞きたがる、知りたがることである。地域に興味や関心を持たせることである。③地域に生きる〝よろこび〟がある。地域には、他所にない自慢できるもの、それを創り出すことである。それが地域住民のよろこびになり、地域への思いを喚起することになる。

纏めて言えば、一人ひとりの住民の〝学び〟の上に、〝実践〟を重ねるに他ならない。そのことが、地域の自立と個の自律による地域自治、住民自治を育み発展させる基になるのだと思う。

風土舎の仲間とともに…私の課題・私の実践…

役所勤めの大半を教育委員会で、社会教育の仕事に携わってきた。

仕事のうえで、「住民自治、地域自治はどのようにしたら、地域に根付き発展できるか」が、私の課題でした。リタイアしても、出生地の旧上久堅村に帰って、現役時代の経験や、人脈、ノウハウを活かそうと、考え続けていた。

カウチン工房

出生地の上久堅に帰って来た時〝地域づくり活動の風土舎を創設しよう〟と、呼びかけをした。それに応えたのは、かつて青年団で活動していた仲間たちで、農業委員、市会議員、分館長・主事、区長、ＰＴＡ会長など、地区の要職を歴任しており、農民、商人、会社員、公務員、自営業者、画家、など多彩な異業種仲間が集まった。

彼らは、「オール上久堅」だが、集落では集団のリーダーでもある。

現役時代からご教示いただいていた信州大学の玉井袈裟男教授が退官の折りに作詩した『風と土の詩』の一部を『風土舎宣言』として発表、これを基に風土舎を創設する呼びかけが合った。それに応えて、上久堅でも『ひさかた風土舎』を創設した。（１９９１年２月）

風土舎の「風」とは、よそ者のことで、行政、大学、研究者、諸々の機関のこと、「土」とは、地の人、地にある物、風俗などのことをいい、「舎」とは、活動する場所や建物のことで、活動のする所を舎とすれば、何時でも、何処でも「舎」は出来ると考えている。

風土舎の具体的な活動内容を記すスペースはないが、①特産品作りの、雑穀栽培（小きび、古代米、こんにゃくなど）の奨励、清酒、ワインの企画、カウチン工房（羊毛の紡ぎ、織り、フェルト加工など）。②学習文化活動の、夏休み期間中の寺子屋の開設（１９９１年～）、風土舎通信の発行（１９９１年～毎月一回５００部発行）、風土舎村塾（随時）。③交流活動の、日本福祉大学大濱ゼミ、（１９９３年～）、京都大学学生自治会（１９９５年から）との交流。ＪＩＣＡ（国際協力機構）（１９９８年～）発展途上国の10カ国12人～15人の、研修員の受け入れと交流をしている。

諸々の活動は、風だけでも土だけでも成就しない。風と土が結びついて結果が生まれる。地域活動は、土が風を呼び込み活動する。まず始めに〝土づくりありき〟である。

夏休み寺子屋

京都大学との交流 11月祭典

風土舎通信保存版

JICA-発展途上国の研修員の受入れ

『風と土の詩』 風土舎宣言

風は　遠くから
理想を含んで　やって来るもの
土は　そこにあって
生命を生み出し　育むもの
君　風性の人ならば
土を求めて吹く　風になれ
君が　土性の人ならば
風を呼び込む　土になれ
土は　風の軽さを　わらい
風は　土の重さを　さげすむ
愚かなことだ
風は　軽く　涼やかに
土は　重く　温かく
和して　文化を生むものを